君の為に、私は戦う

ふぃゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君の為に、私は戦う

【Ｎコード】
Ｎ８２６７Ｂ

【作者名】
ふぃゆ

【あらすじ】
私は、今までの世界に嫌気が差していた。そんな私を救ってくれたのは・・・・あなただった。

第1話　突然の別れ（前書き）

初めての連載です！誤字・脱字があるかも知れませんがよろしくおねがいします！

第1話　突然の別れ

私は、何の為に生きてるんだろう・・・

心から信頼できる友がいるわけでもない。

その人の為なら死ぬことも迷わないような心の底から愛しい人もいるわけじゃない・・・。

こんな場所にいても意味はあるのだろうか・・・。

たとえ私がいなくなっても誰も気づかないだろう。

たとえ気づいたとしても何も思わないだろう・・・。

私がいるための意味が欲しい・・・・。

私は、教室のドアを開けた。

「おはよう」

返事を返してくれたのはほんの数人。
私は泣きたくなる気持ちをこらえて自分の席に座った。

《早く、早く学校が終わればいいのに・・・》

人の視線が突き刺さる。

《なんで、学校なんてあるんだろう・・・？》

外を見ながら考えた。

誰か、友達になってはくれないだろうか？
私は、先生が来るまでの時間ずっと窓を見ていた。

《そういえば・・・》

私は思い出した。昔、喉が枯れるまで歌った“あの”歌を。

「・・・だ」
「みんな、おはよう」

歌いだしを歌おうとしたら担任の先生が入って来た。

「起立。」
私は号令をかけた。
「今日は皆に大事な話がある。とにかく座って。」
先生はそういうと皆を座らせて、口を開いた。

「皆、よく聞け。昨日、西田が死んだ。」

西田・・・去年、一度だけ同じクラスになった事がある。
普段はおとなしいくせに、行事とかになると、一番燃える奴だった・・・。

そして、

実は私の唯一の友達だった奴だった。

でも、私はなんとも思わなかった。
西田の親友だった人たちが次々に泣き出した。

西田の机には花が活けてあった。

私はさっき歌いかけた歌を歌った。

「誰だって～一度は変わる～夢を追い続けてるのさ～知らないうちに皆が変わるのは、僕が遅いからさ～・・・」

今まで、泣いてた人が泣き止み、ある人は鼻歌で、またある人はその曲をそれぞれの形で歌い出した。

西田の為に皆が歌う鎮魂歌(レクイエム)。

皆の歌声・・・西田に届けばいいな・・・。

第2話　犯人発覚

皆が落ち着いてきたところで、先生が重い口を開けた。

西田は、交通事故で死んだらしい。
居眠りトラックが突っ込んできて・・・・・・・打ち所が悪かったらしく即死。
現在、犯人は自首してくれて刑務所の中にいるらしい。
先生が話してくれたのは、そこまでだった。

私は、ふと斜め前の席に座っている伊南川の方を見た。

《笑ってる・・・？》

伊南川は西田を怨んでいた。

さっきだって、伊南川は歌ってなかったのだ。
《もしかして・・・》

私は、逸る気持ちを抑えて伊南川に聞いた。

「・・・なんで笑えるの？学年の仲間が・・・西田が死んだのよ？」
そう聞くと、伊南川はこっちをチラッと見た後・・・

「アイツなんて死んで当然なんだよ！！」
その言葉が返ってきた。

西田は、人をいじめたりしなかったのに・・・。
むしろ、いじめを心の底から憎み、許していなかった。

それなのに・・・！　　なんで・・・

「なんで死んで当然とか言ってんのよ！！」
私は、初めて心の底から人を睨んだ。

その視線に気づいた伊南川は、私と眼をあわせないようにしながら
こっちに近づいてきた。

「聞きたいか？なぜ、なぜ西田が死んだのかを・・・」

「えっ！？まさか・・・・」

私はぎょっとした。

まさか、

「俺が、西田を殺した。」

伊南川が・・・・

西田を殺したなんて・・・・。

第3話　私の中の決意

（伊南川が、西田を殺した・・・）

その言葉が頭に響いた。

「あなたがトラックを動かしたの？」

「簡単だね！いやぁ～！アイツが吹っ飛ぶとこは絶景だったねぇ～！！」

私は怒りで何も言えなかった。

「どうして、あなたは西田を殺したの？あなたには動機がないじゃない。」

「動機？んなもん最初からあるよ？」

「アイツがウザかったから。」

私は、胸の奥から込み上がってくる感情を抑えることができなかった。

パチンっ

気が付けば私は伊南川の頬を叩いていた。

「ウザかっただけで、西田を殺したの！？」

私は初めて友を亡くしたことを心から悲しんだ。

伊南川は、私を睨んでいる。

「もうやめろ！！」

先生の怒鳴り声で私は我にかえった。

「ここでいくら言い争っても、西田は戻ってこないんだ。・・・わかるな？つらい気持ちはよくわかる。だがな、暴力はいけないんだ！・・・わかったな？」

先生はこういうけど、こいつは・・・こいつは・・・

《西田を殺した・・・！》

私は、悔しい感情に囚われたままだった。

《先生は何も知らないからそう言えるんだ！》

私は心の中で叫んだ。

《・・・西田・・・もう一度あなたの声が聞きたいよ・・》

「くやしいか？」

伊南川が、私に向かって言ってきた。

私は伊南川を数秒睨んだら、

「悔しい？いい加減にしてよ！！大体ねぇ、そんな簡単に人を殺していいなんてねもしヤクザが許しても私が許さない。絶対、私がお前を少年院行きにしてやるわ！」

こう吐き捨てた。

第４話　まだわからない真実

《西田、待っててね・・・絶対、伊南川の悪事を暴いて見せるからね・・・！》

私はそう心に誓いを立てた後、伊南川周辺を調べることにした。

その日の放課後、私は、伊南川の机を調べた。

机の中に手を入れると、何かがあった。

それを引き出して見てみた。一枚の写真だ。

その写真には、伊南川と西田が仲良く写っていた。

「な・・・んで？」

私は混乱した。

西田と伊南川は、仲が悪かったんじゃなかったのか？悪くないなら、なぜ伊南川は西田を殺したと言ったのか・・・？考えれば考えるほどわかんなくなっていった。

その写真をよく見ると、所々にシミが付いていた。

「これって・・・涙？」

《あいつが涙なんか・・・》

流すわけない、そう言いかけたとき後ろから物音がした。

「なにやってんだ～？もう帰れ～。」

先生だった。

「は、は～い・・・」

私は写真を机の中に戻すのも忘れ、そそくさと学校から逃げ出すように帰った。結局、その写真を持って帰ってくるという形になってしまった。

部屋の中、私は・・・

「あはははは、な～んで持って帰ってきちゃったんだろう・・・」

一人でぶつぶつ言っていた。

「まぁ、明日返せばいいでしょ～！」

とりあえずプラス思考でその場の妄想はなんとか乗り切った。

でも、

「なんで、伊南川が・・・？」

涙なんて流すのだろう・・・？殺したことを後悔でもしているのだ

ろうか・・・？

私は、明日伊南川に聞いてみることにしてその日は床に付いた・・・。

第5話　わかり始めた何か

次の日、私はいつもより早く来て、伊南川を待ち伏せる形をとった。

だが、その日は伊南川は来なかった。

私は、伊南川が学校に来てなかったのを不審に思った。

《おかしい・・・なんで来てないの？》

「もしかして・・・」

私は、写真を見つめた。

帰り、私は先生に必死に頼み込んで聞いた伊南川の家の前に来た。

《マンションなんだぁ・・・。》

私は、素直に伊南川の家を見て感心していた。

ピンポーン・・・

チャイムを鳴らすが一向に出る気配なし。

「どうして？」

私は考えた。そして、１つの答えにありついた。

「なんで、いないのよぅ！！」
私は回りを気にせずドアを叩きまくり、ドアノブをガチャガチャ回しまくった。

「お宅、優斗君の彼女？」
「いえ、違います！」
手をぶんぶん振って力いっぱい否定した。
「伊南川さん家に用があるの？」
この人は、隣に住む太田さんと言う人らしい。
私は太田さんの見た目の迫力に押されながらこう聞いた。
「あの、優斗君いますか？忘れ物を渡しに来たんですけど・・・」
太田さんの口からとんでもない台詞が出てきた。

「お隣なら今日の朝引っ越したわよ？」
「えっ？」
私は、さっきまでドアを叩いてた手の動きを止め、ドアノブを握っていた手の力が抜けた・・・。
「ど、何処に引っ越したんですか！？」

私はかなり必死で太田さんに聞いた。

「う～ん・・・そこまでは分からないわね。」

太田さんから帰ってきた答えはかなりシンプルだった。

「なんで伊南川が引越ししたの？」

やっぱり西田が関係してるのか・・・？

第6話　ちょこっと辛い真実パート1

《写真は私が持ってる・・・だけど、この写真は伊南川のだ。伊南川に返さなきゃいけない・・・どうすれば・・・？》

「あっ、そうだ。」

私は、１つの名案を思いついた。

「先生！」

私は学校に戻って、担任の先生に伊南川の住所を聞き出そうと思った。

話をあらかた説明し終わると先生は机に乗っかっているコーヒーカップをいじりながら

「実はね・・・こんな事、今更言うのもなんだけど・・・転校したってのは・・・本当なんだが、何処に引っ越したのかは・・・わか

らないんだ。・・・力になれなくて・・・すまん。」

私は帰路に着いた。半分、放心状態で。

《なんで、引越し先を学校に教えないでいっちゃうんだよぅ・・・。》

家に着いて、私は毎日の習慣になりつつあるポストの中を覗いた。

中には私宛の手紙が一通。

宛先をを見て私は驚いた。

「伊南川・・・？」

《なんで伊南川が私に手紙を・・・？》

家に帰って、私は一目散に自分の部屋に引きこもり手紙の封を切った。

「どれどれ～？なんて書いてあるのかなぁ～？？」

私は、自分宛の手紙なのにこそこそ回りを気にして読んでいた。どんどん読んでいくに従って、私は顔から表情が消えてった。

そして、最後の一文を読み終わった時・・・

「・・・！」

私の頬を一粒の涙が流れていた。

〔本多へ、ん～と、何書いていいかまったくわかんねーから、適当に書くわ。西田が死んだ日、俺ーめっちゃ悔しかったんだ。西田の命を奪った運転手さえ恨み殺そうと思ったくらい・・・。・・・・・・ゴメン、話それた。んでさ、その日、本多がやけに突っかかってきただろ？それで・・・腹たって、八つ当たりみたいな形になった・・・まぁ、辛く当たっちまったんだわ。
ホントに、ゴメン。
もし、俺を許してくれるなら下に書いてある住所に手紙をくれ。

この手紙を捨ててくれても構わない。

ＰＳ，実は・・・西田も俺も、本多の事好きだったんだぜ。

伊南川　優斗　〕

第7話　ちょこっと辛い真実パート2・・・？

私は涙が止まらなかった。

「なんで・・・・・突っかかっていったのは・・・私なのに・・・・」

それから、しばらく泣いていた私。

そして、冷静さをある程度取り戻した私は、ある疑問が浮かび上がった。

《何で西田の好きな人を知ってるのか》

《普通・・・少なくとも私は、あまり仲の良くない人に自分の好きな人は教えない・・・。じゃあ、なんで伊南川は西田の好きな人を知っているんだろうか・・・？》

小一時間悩んだ、考えた・・・が、どれもしっくりくる答えにはならなかった。

「聞いて、見るしかない・・・かな？」

私はそう呟くと、自分の机の引き出しから便箋を引っ張り出して思いつくまま書き綴った。

〔伊南川へ。あのぉ、知りたい事がいっぱいありすぎて混乱しそうなので、一番知りたいことを書くね。
伊南川は何で西田の好きな人・・・私だって知ってるの？
てか、なんで私みたいな人を好きになるの？私、いいところなんてなんにもないよ？

最後に・・・私、伊南川がムシャクシャしてた時に余計ムシャクシャするような事言ってごめんなさい。

ＰＳ，私は、伊南川の事、好きかどうかって聞かれたら、・・・嫌いだけど、友達としてならどう？って聞かれたら、好きって答えるよ・・・
元気でね。

本多　紗織〕

ポストに手紙を出すために私は外に出た。

《西田・・・空の上で何してるのかなぁ・・・・？》

夜空を見ながらそんな事を考えていた。

第８話　張り裂けそうな想い（前書き）

某ゲームと言うのは、任天堂で出てる、ゲームキューブ版とＰＳ２版があるというあれです（笑）

第8話　張り裂けそうな想い

「夜空を駆ける流れ星を今、見つけられたら何を祈るだろう・・・・・」

私は、某ゲームの主題歌を歌っていた。

「なつかしいなぁ～！西田と歌った最後の曲だぁ・・・・。」

私は、ポストの前に仁王立ちするといきおいよく手紙をポストの中に突っ込んでパンパンっと手を叩いた。・・・・神社のお参りを思い出してくれれば解ると思う。

《手紙が、ちゃんと届きますように！！》

翌日、さすがに伊南川の返事は返ってこなかったけど、一通の手紙が入っていた。私は宛名を見て鳥肌が立った。

「信じられない・・・。」

なぜなら、その手紙の宛名が今は亡きあの西田だったからだ。

「なんで・・・？」

私は、すぐに消印を見てみた。

「消印は・・・事故に遭う・・・前日？」

私は部屋に戻ると、すぐに部屋に鍵をかけゆっくりと手紙を読み始めた。

〔本多へ、お前とはいつも馬鹿らしい話しかしてなかったな・・。
だけど俺は、お前の事が好きだった。

追伸。伊南川とは、仲良くしてくれよな！
ｂｙにしだ☆〕

私は、西田の最期の手紙を読み終わった時、涙で前が見えなくなった。

私は、自分のした事があまりにも・・・伊南川を苦しめていた事を悟った。

《伊南川が、あの時一人だけ歌ってなかったのは、悲しみを抑えるのでいっぱいいっぱいだったから・・・

私の勘違いを否定しないで、言われた通りに悪役を演じたのは・・・きっと、私のイライラを吸い取るた・・・・め・・・》

私は、改めて自分が今までしてきた事がどんなに重い事かを・・・知った。

そして、

伊南川は・・・西田にとって大切な友達だったんだ・・・・・

《お願い、伊南川・・・帰ってきて！！》

第9話　なんかわからない私の想いと現実と。

《どうしよう・・・。》

私は心の中で何回も考えた。

なぜなら、私は西田に頼まれた事を何一つ守ってないからだ。

「うっし！」

私はもう一回私は伊南川に手紙を書こうと考えた。

〔伊南川へ。

ごめんなさい！！！

えーと、私伊南川の事勘違いしてた！本当にごめんね？

私、昔から人と心を通わせるのが苦手でときどき人の気持ちがわかんなくなって・・・

とにかくごめんなさい！！

本多　紗織〕

私は走ってポストに入れに行った。

《伊南川・・・返事ちょうだい・・・、お願い！！》

翌日、私は一目散に郵便受けを見に行った。

「はいって・・・ない・・・」

私は肩を落としてそのまま家に戻った。

《まぁ、すぐに返事がくる訳ない、か・・・。》

私は、これでもかってくらいマイナス思考になった。

《伊南川・・・》

私は、毎日をただ人形の様に生きていた。時間だけが、過ぎてくだけの世界。

西田が死んで、半月ほどで私のクラスは何もなかったかの様に表面上は元通りになっていった。

私以外は。

《なんで、みんな平気なんだろう・・・？》

「本多！！！」

急に先生に呼ばれた私は、

「なんですか？」

と先生に聞いた。

「いいから、ちょっと職員室まで来なさい。」

私と先生は一緒に職員室に行った。

そして先生が口を開いて・・・

「本多、よく・・・聞いてくれ・・・伊南川が・・・」

私は、そこで気を失った。悲しい現実を受け止めるのを、拒むように・・・。

最終話　そしてあなたという存在

私は、夢を見た・・・伊南川が私に手を振って何処かに行く夢を・・・。

気が付けば、私は保健室のベッドの上で眠っていた。

『伊南川が死んだ』

「なんで・・・？」

私が呟くと保健の先生がやさしく

「職員室で倒れたのよ・・・？」

と言ってくれた・・・・・・・・・が

「違う！！！！」

私が知りたいのは・・・そんな事じゃない・・・！！！

「なんで私の事を分かってくれた人が目の前から消えるの！？」

私は怒りと同時に涙も溢れてきた。

最初はすごく憎らしく思っていたけど、本当はとてもやさしい伊南川。

だけど・・・だけど・・・・

「伊南川・・に・・は、もぅ・・・会えないよぉ・・・」

私が落ち着くまで、保健の先生は傍にいてくれた。

それから、残りの中学生活ずっと・・・回りの景色が色のないように見えた。

何回か死のうと思った。

でも、出来なかった。

伊南川と西田が2人して私を止める気がしたから。

あれから、5年がたった。私は、普通の高校を出て前々からやってみたいと思っていた仕事に就くことができた。

「紗織、今日暇なら遊びに行こうよ！」
同僚の香住が、私に聞いてくる。

「ごめん、今日はちょっと・・・」
さらっと断った私を香住は恨めしそうに睨んでいるが・・・放っておくことにした。

私は、霊園に来た。今日は西田の命日だ。

「西田、久しぶり。今日はすごい晴れてるね。近くで見たら、もっとすごいの？・・・なんて、えっと、伊南川とは仲良くしてる？ケンカなんてしてたら怒るよ？
・・・ちなみに、私の方はいろんなことになれて来た頃。

あ、そうだ！！私昨日誕生日を迎えて２２歳になりました！お酒飲めるんだよ？いいでしょ～？・・・・でも、２人は・・・二度と、お酒を飲むことは・・・できないんだよ・・・ね？」

私は、そう思うと涙を零していた。

私は涙を止める事が出来なかった。
ここは霊園。私の他にも泣いてる人たちは少しいるが、多少回りがざわついてきた。

＞本多、泣くなよ！＜

「え？」

私は、空耳かと思った。けど、

どこからか、懐かしい声が聞こえてきた。

「にし・・・だ？　　！西田なの？」

＞本多・・・！＜

「西田・・・どこ？見えないよ・・・」
私は、声のするほうに手を動かして・・・触れないけど、見えないけど・・・とりあえず、肩に手を置いているつもりで手を止めた。

「西田ぁ～～！」

・・・危ない人だ。確実に危ない人だ・・・私は心のどこかでそんな事を思っていた。だが、今はそんなの関係ない・・・。

西田に会いたい、会いたい、会いたい！！！

その想いが通じたのか、また西田の声が聞こえてきた。聞いてると、心が癒される・・・昔と変わらない声が・・・。

＞本多、泣くなって・・・俺や、もちろん伊南川だって心配してる・・・だから、泣くなっ俺達を心配させる気か？＜

西田の・・・声だぁ・・・。

私は、心が軽くなった気がした。

「うん、私・・・もう大丈夫・・・だから、もう心配しないで？」

中学時代からとまっていた歯車を私は再び回し始めた。そんな私からは自然と笑みがこぼれていた。それを見て、西田は安心したのだろう・・・

＞もう大丈夫・・・だな？＜

そう言って、西田は往ってしまった。

その時だけ、私は一瞬西田の姿が見えた・・・・そんな気がした。

《西田・・・》

私は、霊園を後にした。そして、西田と伊南川両名の様々な思い出を思い出していた。

《初めて、男子とケンカした相手が・・・伊南川だった。

西田との思い出は、全部私の宝物だよ・・・》

私は忘れない・・・。もちろん、伊南川と西田・・・2人の事もだけど・・・

西田の為に本当の事を調べようとした事・・・

伊南川と・・・・ほんの少しだけ心がつながった事・・・

そして、

君の為に、私が戦った事を

最終話　そしてあなたという存在（後書き）

これにて、終了です。ここまで読んでくださいまして、ありがとうございました！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8267b/

君の為に、私は戦う

2010年11月23日16時15分発行